

哀悼 津・土佐・駒・巖大夫の永眠

紋下竹本津大夫哀悼

本誌同人 内田 富太郎

歸還した愛息濱大夫改名披露興行の晴れの舞臺を眼底に入れず、出演も出来ぬ儘、遂に文樂の紋下竹本津大夫は泉黄の人になつた。藝歴六十年、長い舞臺生活の終幕を功成り名遂げて閉ぢた感が深い。顧て哀悼の情念を禁じ得ない。

豫定された文樂座四月興行「妹脊山」の持役大判事とは逆に我が子久我之助を残して、寂然彌陀の御國へ旅立つた。行年七十三歳、文樂最大の古風さを身に付けた雄厚巨腕の大大夫として其の藝貌は昭和正期の文樂史に不滅の光芒を放つてゐる。

亡き故人の藝術的足跡と人間的逸話に就いては、同人の諸先輩が詳述すると想ふ故私は断片的に津大夫の藝面を秃筆する。

「津大夫は世話物が良い」……と云ふ説が生前有識者間に高かつた、此の藝術的據點に對して全面的に讃同しないが、一面の眞理を突いて適評と思ふ。

其の意味で世俗的に傑作と、折紙付けられた「寺子屋」より私は「大文字屋」を高く評價したい。

質店（染模様妹脊門松）と俱に専助助の傑作大文字屋（紙子仕立両面鑑）は名世話語りと定評あつた故土佐大夫が得意とした。

……が津大夫のこの一段も非常に優秀で土佐に劣らなかつた、殊に助右衛門の人物表現は滋味津々たるものがあつた。

土佐の助右衛門は一見「酒屋」の宗岸の如く、浮世の酸いも甘いも噛み分けて圓悟した洗練さで巧緻に演出し

たが、津のは如何にも養子になつた人物らしい篤實な人間性が渾然滲み出て素朴な深い親情が重厚に潤流した。

母親妙三にしても、土佐のは例の美聲で、嫺々と肉縁の親情をリズムカルに演奏して遺憾なかつたが、津は腹でじゆつくり泣く陰影があつてその迫真性が惻々と胸を打つた、お松のクドキなど土佐は誠に哀艶美調を極めたが、津もあの雌聲で切々と貞女の哀心を妙描した、取り分け榮三郎の描出は適切で律氣生一本の妹想ひの眞情を世話物の約束内で遅くましい情念の中に力強く雄描した只後半悲劇から喜劇へ轉換する變り目からはケレンでないケレンの妙致を持つ土佐の輕妙な面白さに及ばないが前半は隨所に自らの長所を發揮した。

特に肉親妙三と義理親助右衛門の哀悶を切實に語り分ける腹の深い表現力に雄鋭な陰影を感じた。

それとラヂオで聽いた「堀川」が不思議に感銘深く残つてゐる、殊にあの盲目の老母を巧くまず持味で、じゆつくり描き出す腕が流石津大夫で非凡だつた。

古靱の老母精妙で、深い心韻があるが、一體に古靱のは「おつる」に稽古するに邊りに精緻な味を出す。

津はそれと反對に、あの邊り古風だが可成り荒削りで凡調だ。古靱程、うらぶれた老母の心情と無心な小娘の對照感が詩韻深く、迫らない。しかし「これまでお俊が

世話になつた」……のクドキになると俄然白眉でこの一段中最も生彩を放つ。

しがない人生に、娘お俊を唯一の光明とする、盲母が浮世の義理に一人娘を心中にやる、切愁が文藝特有の藝術的無情感を以つて悲劇美を渾流させた。

草深い在所に細々と露命を繋ぐ遊女の母の土の香と善良ないじみさが素朴な情感を通して犇々胸を刺り、「眼は見えねども」……の段切れも、古靱だと深緻な心理的段階をモリ上げて素晴らしいが、津のも深い諦感的な錆びが脈流して深々たる義大夫美を濃潤に漲らせた。

先輩齋藤拳三氏は日頃よく津大夫の「八百屋献立」が一聴したいと語られてゐたが、私はその着想に深き興趣を抱きつゝ遂に未聽に終つて了つた。

淨界の一部に津大夫は紋下として實際價值に乏しい人だつたが、襲名當時名人上手がバク／＼他界して爲めに紋下になり得たとの説をなす人もある。

よし環境的な幸運はあつたとしても、義大夫淨瑠璃は相撲同様實力がものを云ふ。

勿論古靱大夫の挺身的な友情も預つて大いに力があるが、津大夫の持つ藝格の雄大さ強靱な腹力、素朴な重量感が文藝最高の榮位紋下を獲得させたのだと思ふ。

しかし晩年その友情深い古靱と紋下譲渡問題で、一時

的にも誇つたことは遺憾事であつた。

あれは公平に見て津が退く時機を逸した惜恨を感じさせた。幸福そのものゝ如く云はれてゐた津大夫も、愛息津の子大夫改め濱大夫改名興行出演の直前に倒れて遂に永劫の眠りについたのは、何としても故人最大の不幸である。喜悲兩極端をその生命の最後の段階に描きつゝ從容として永眠した津大夫は身を以つて人生の舞臺に、死の淨瑠璃を演出したとも云ひ得られる。

生前故人が得意の語り物とした日向島、逆鱗、合邦、吃又、沼津に就ては他日粗記したい。

○

津大夫の死は決定的に古靱の存在を榮三、文五郎と共に國寶化させて來た。

巨木津大夫を失つた空洞を文樂當事者が如何にして埋めるか、殘念乍ら私は希望感を抱き得ない研鑽深綴の人古靱大夫を新總帥として文樂は藝術的に破局の前夜に直面しつゝある。

宛ら嘗つて圓菊左を失つた明治末期の歌舞伎劇壇の如く。しかし幸に古靱には圓菊に比肩する傑質がある。

文樂經營者たる會社松竹は古靱をして如何に文樂を統率させるかに心を砕くよりも、専心古靱を名人圈内に突入させるが最善の良道である。

純藝術的な研鑽の餘裕を古靱に與へることを忘却して

はならない。挿言すれば駒津の死去によつて壊滅した世話物陣の空隙を強いて古靱を用ひて興行政策的にふさぐ愚を採らず、到らずと云へど中堅を起用して古靱は飽く迄其の本領を堀り下げ眞價を存分顯現出來る良心的な語り物に打ち込まず可きである。

不吉なことを云ふやうだが、古靱なき後の文樂を思ふと慄然たらざるを得ない。

恐らく義大夫淨瑠璃の最後の名人となるであらう古靱大夫に對して文樂當事者は周到な考察と敬虔な果斷を持つて「昭和文樂史」に偉大な記念塔を打ち建てる最高演出へ良心的な眞闘を期待したい。と同時に大隅、織大夫等の大成へ拍車する展道を眞剣に開拓すべきである。

(十六、五、十日)

土佐と伊達

本誌同人 武智鐵 二一

駒大夫の死を聞いて一兩日にして六代目土佐大夫の計に接した。彼の死が文樂座の消長や、義大夫界の盛衰に、直